

序論)

みなさんは、裁判とか裁判官というものに、どのようなイメージを持っておられるでしょうか。

裁判というと、被告の弁護士と検察がそれぞれの正当性を主張し、その意見をぶつけ合わせてどっちが正しいかを明らかにするもの。というイメージがあると思います。

また、裁判官は私情を挟まず、時には冷酷な判決も問答無用でください。そうゆうイメージがあるのではないのでしょうか。

今日の箇所は、その私達が思い描いているさばきや、裁判官とは違う裁き主を、【主】神様がたててくださるという預言です。

文脈)

先週の箇所で神様は、偶像に対して挑発的な言い方をして「後に起こることを言ってみなさい」「未来に起こることをいってみなさい」といわれ、でも「実際は、偶像には未来のことを予見する知恵も、未来を自分の思う通りに作り出す力もないでしょ。でも、わたしは未来のことをちゃんとと言えるし、その預言したとおりのことを起こすよ。」っと、そのように神様が教えてくださった箇所でした。

実際、神様は「わたしが北から人を起こす」といって、ペルシャの王キュロスのことを預言されて、歴史の中ではその通りになりました。

このように偶像とまことの神様を比べてみるのならば、偶像は未来のことを預言することもできないし、未来を作り出すこともできない。でも、神様は歴史を支配されている方ですから、未来のことを預言することもできるし、その預言した通り、神様のご計画の通りにことを行わせることができるわけです。

今日の箇所の預言は、そのキュロス王の預言よりもっとすごい【主】のしもべ、【主】が特別にさばき主としてお立てになる方のことを預言しています。

1) この裁き主は特別である

まずは1節を読んでみましょう。

42:1 「見よ。わたしが支えるわたしのしもべ、わたしの心が喜ぶ、わたしの選んだ者。わたしは彼の上にわたしの霊を授け、彼は国々にさばきを行う。

この箇所をみると、この【主】がおたてになる【主】のしもべは本当に特別な存在であることがわかります。神様がこのしもべをみると神様の心が喜ぶんだそうです。ここでいう「わたしの心が喜ぶ」というのは、「私の魂が喜ぶ」と言い換えてもいい言葉が使われています。つまり、神様の心の奥底、魂の中心から神様に喜びを抱かせる存在。それがここで、【主】がおたてになる「しもべ」なわけです。

当然、そのように特別な存在ですから、神様はこのしもべのことを支えてくださるし、神様の霊がそのしもべの上にあって、このしもべは神様に選ばれた存在として立たされるわけです。

じゃあ、神様はこの特別なしもべに何をさせるかということ、「彼は国々にさばきを行う」と言われています。元のヘブル語をみると「彼は国々に判決を言い渡す」と訳すことができる言葉が使われています。つまり、このしもべは神様に特別にたてられた裁判官なのです。

2) 争わず、傷つけない、希望の裁き主

じゃあ、この特別なしもべ、この特別な裁判官はどのような人かと言うと、2節～4節にはこの裁判官の特徴が上げられています。

42:2 彼は叫ばず、言い争わず、通りでその声を聞かせない。

42:3 傷んだ葦を折ることもなく、くすぶる灯芯を消すこともなく、真実をもってさばきを執り行う。

42:4 衰えず、くじけることなく、ついには地にさばきを確立する。島々もそのおしえを待ち望む。」

この特別な裁判官は裁判の場で叫んだり、言い争ったりしないそうです。実際、現代の裁判官は中立の立場で検察側と被告側の意見を聞いて物事を判断しますが、イザヤ書の時代、遙か昔の王様とか権威者が裁判官をしていた時代は、その裁き主が大きな声を上げて、被告を怒鳴りつけたりすることはよくあったわけです。

でも、この【主】がお立てになった裁判官はそのように怒鳴りつけて叫んだりすることはしません。そればかりか、(3節表示)「傷んだ葦を折ることもなく、くすぶる灯芯を消すこともなく、真実をもってさばきを執り行う。」といわれています。つまり、傷ついた者がそのまま折れて、倒れてしまうことがないように癒やして下さり、気力がなくなっているようなものに活力を与えて、それによって裁判を行うっていうのです。ここから、非常に優しい裁判官であることがよくわかります。

優しい人は弱い人というイメージがありますが、この裁判官は弱くは在りません。色々、抗議の声をあげられたり、文句を言われたりしたとしても、この裁判官は（4節表示）「衰えず、くじけることなく、ついには地にさばきを確立する。」つまり、訴える側がどんなに大きな声で主張したとしても、それによって振り回されることなく正しい判決をくだされる。ということです。

優しくて、正しい判断をくだされる裁判官。みなさん、このような裁判官がいたらどうですか？いいですよ。そうゆう裁判官でいてほしいと思いますよね。だから、この裁判官の判決は「島々も・・・待ち望む」のです。この「島々も・・・待ち望む」という箇所は「海沿いの国々も・・・待ち望む」と訳している聖書もあります。つまり、この特別な裁判官は、島々、国々、世界の人たちの希望となる裁判官なわけです。

では、この裁判官とはだれでしょうか。それは私達のためにこの世に来てくださった【主】イエスキリストです。そのことはマタイの福音書を見るとわかります。

マタイの福音書12章では、片手が使えない人がいて、パリサイ人たちが「安息日に人を癒やすのは律法にかなっていませんか？」という質問をしたときに、「安息日に羊が穴におちたら、その羊を放って置く人はいないでしょ？」っと、そのようにいわれて、イエス様はその片手が使えない人を癒やされました。ユダヤ人的にいうと安息日には仕事してはいけない日だから、イエス様がその人を癒やすのは違法なわけです。でも、イエス様はそれが神様の前で正しいことであることを知っていましたから、その神様の判断を知らせるために、堂々とその人を癒やされました。この一連の出来事を指して、これはイザヤ書42章の預言が成就したことだよ。とマタイは言っています。

実際に、そのマタイの福音書12章の部分を読んでみましょう。12章17節から21節 長いのでこれは私が読みます。

マタイの福音書

12:17 これは、預言者イザヤを通して語られたことが成就するためであった。

12:18 「見よ。わたしが選んだわたしのしもべ、わたしの心が喜ぶ、わたしの愛する者。わたしは彼の上にわたしの霊を授け、彼は異邦人にさばきを告げる。

12:19 彼は言い争わず、叫ばず、通りでその声を聞く者もない。

12:20 傷んだ葦を折ることもなく、くすぶる灯芯を消すこともない。さばきを勝利に導くまで。

12:21 異邦人は彼の名に望みをかける。」

マタイは「国々」とか「島々」を異邦人という言い方に変えたりしていますけども、基本的にはイザヤ書のみことばのままです。

私達のためにきてくださった【主】イエスキリストは、神様が特別にお立てになった【主】のしもべであり、特別な裁判官です。でも、この裁判官は人を弱いままで放置して苦しむままにされるようなお方ではありません。むしろ、安息日に人を癒やすのは悪いことだと。そう思っている人たちの中でも、堂々と癒やしを与える。そうゆう裁判官なのです。みなさん、この裁判官が示す判決ってなんでしょう。

「罪人には死を！」という判決でしょうか。いいえ、罪人であったとしても、イスラエル人にとっては神の民とは認められない異邦人であったとしても、この【主】イエスキリストのあわれみによるのならば、その人も癒やされ、救われるというのが、この特別な裁判官が言い渡す正しい判決なのです。

だから、このお方の教えは、島々、国々、異邦人、そして、私達の希望になるのです。みなさん、これはイエス様の自分勝手な判決なのでしょう。

いいえ、違います。(イザヤ書 1 節を表示) 先程のイザヤ書 42 章 1 節でも、この特別な裁判官、イエス様のことを【主】なる神様が支えると言われているし、このお方には「わたしの霊」つまり、神の霊である聖霊様が授けられているといわれています。

つまり、イエス様の働きは三位一体の神様、父なる神様、子なるイエス様、そして、聖霊なる神様の働きでもあるのです。だから、傷んだ葦をおらず、くすぶる灯芯を消さない。という、イエス様の赦しの判決というのは、三位一体の神様のみ心なわけです。

4) 【主】と共にある裁き主

神様はですね。これはしもべの暴走、イエス様が勝手にやっていることではないことを示すためにイザヤ書 42 章の 5, 6, 7 節でこのように言われています。読んでみましょう。5 節から

42:5 天を創造し、これを延べ広げ、地とその産物を押し広げ、その上にいる民に息を与え、そこを歩む者たちに霊を授けた神なる【主】はこう言われる。

この預言は、世界を創造し、大地を作り、人々にいのちを与えた創造主なる神様のことばだ。 という宣言ですね。その創造主なる神様がなんといわれるか。6 節

42:6 「わたし、【主】は、義をもってあなたを召し、あなたの手を握る。あなたを見守り、あなたを民の契約として、国々の光とする。

「わたし」というのは神様です。「あなた」というのは、特別なしもべであり、裁判官であるイエス様のことです。神様は、イエス様のことを「義をもって」・・・神さまの正しさをもって裁判官として任命し、そのイエス様の手を握り、イエス様を見守り、イエス様ご自身を神様の契約とされたのです。だから、聖餐式の時には「これはわたしの血による新しい契約です」というイエス様のことばが読まれます。

イエス様は、神様が私達にイエス・キリストによって赦しを与えるという契約そのもの、神様の救いの約束、そのものなわけです。

イエス様のことを、人々を癒やし、救い出す裁判官として任命されたは、誰であのでしょうか。創造主なる神様なのです。

だから、イエス様は国々の希望の光になるし、7節

42:7 こうして、見えない目を開き、囚人を牢獄から、闇の中に住む者たちを獄屋から連れ出す。

とされています。私達、罪人はですね。その罪によって霊の目を閉ざされ、霊的な死という暗い牢獄の中に閉じ込められていた者です。でも、神様は救い主イエスキリストによって、その霊の目を開き、罪の牢獄、死の暗闇の中から私達を解放してくださるのです。

だから、キリストによって救われると、私達は神様のことがよく分かるようになるし、神様のみことばがよく心に入るようになるし、人生の暗闇から解放されて光の中に置かれるのです。

5) この裁き主をたてられる方こそ本当の神様である

みなさん、これは偶像にはできないことです。偶像は未来を預言することもできないし、私達を癒やし救い出すこともできないのです。

だから、神様は8節のように言われています。

42:8 わたしは【主】、これがわたしの名。わたしは、わたしの栄光をほかの者に、わたしの栄誉を、刻んだ像どもに与えはしない。

イエス様を、癒やし主、救い主としてお立てになった【主】こそが、本当の栄光を持っておられるお方であり、偶像や偽りの神には、この救いを与えるという栄光は、絶対に現せないものなのです。

だから、偶像と真の神様の違いを示すために。神様はあらかじめ、イザヤの時代に、イエス様のことをしもべとして預言する。メシア預言を今日の箇所でも語られているのです。9節を読みましょう。

42:9 初めのことは、見よ、すでに起こった。新しいことを、わたしは告げる。それが起こる前にあなたがたに聞かせる。」

キリストが来られる前に、イエス様のことをこのように預言されていた神様こそ、まことの神様です。この世の偶像、この世の偽りの神たちには絶対できないことを【主】はされました。

それはイエスキリストという【主】のしもべであり、特別な裁判官によって、世界に癒やしと救いを、そして、神様からの契約として私達に与えるということです。

まとめ)

みなさん、だから、この預言で示された【主】イエスキリストは救い主なのです。だから、そのイエス様を送り出された神様こそが、唯一まことの神様なのです。

私達は、「傷んだ葦を折ることもなく、くすぶる灯芯を消すこともない」癒やしと救いを与える裁判官を、【主】なる神様が私達に送ってくださったことを感謝しましょう。

そして、その【主】なる神様によって立てられたイエス様こそ、世界の希望であり、私達の希望であることを改めて信じ、イエス・キリストという裁判官によって救われるという新しい契約を握りしめ、キリストを自分の希望として歩んでいきましょう。

それが真の神様の計画であり、私達に与えられためぐみです。